

8. 再び文化の殿堂に

1951年(昭和26年)のサンフランシスコ講和条約締結で日本は主権を回復しましたが、その後も全国の接收施設の返還はなかなか進みませんでした。公会堂も強制接收から米軍による賃貸契約に変わりましたが、日本人が使えない実態は変わりませんでした。

戦後10年が経つのにいまだ返還の気配がなく、しびれを切らした市内の文化関係者は、1955年(昭和30)年8月に公会堂返還期成同盟を結成しました。音楽、演劇、舞踊の実演団体や鑑賞団体、また新聞社、放送局など40団体が参加し、嘆願書を各方面に送りました。



その結果ようやく返還が決定し、1956年(昭和31年)2月15日、米空軍司令官から名古屋市に引渡書と鍵が渡されました。戦争末期の本土爆撃による利用停止とその後10年半の接收を経て、公会堂は芸術文化を渴望する市民とともに戦後のあゆみを踏み出したのです。



返還時の看板架け替えの様子

戦後になるとバレエは市民の間に急速に普及しました。昭和 26 年の新聞にはバレエ教室が全国各地に続々と誕生していると報じています。名古屋はバレエが盛んですが、現在あるバレエ団の前身となる研究所やスタジオがこの頃に生まれました。

舞台での上演も増え、公会堂では接收中の 1950 年(昭和 25 年)前後から谷桃子、貝谷八百子など東京のバレエ団がたびたび公演し、また海外からもアメリカのスラヴェンスカ-フランクリン・バレエ団などが訪れています。

地元勢としては 1948 年(昭和 23 年)に名古屋バレエクラブが、翌年には中京バレエ研究所が公会堂で発表会を開催、その後継である越智實バレエ団もたびたび公会堂で公演しています。1955 年(昭和 30 年)には中京芸術洋舞合同公演が行われ、戦前からのモダンダンス系と戦後のバレエの舞踊家が初めて一堂に会しました。

バレエの話に続いては、海外オーケストラの公演についてです。戦前はまだフルオーケストラの来日公演はありませんでした(唯一、日比谷公会堂で 1933 年(昭和 8)年にレニングラード交響楽団の記録があります)。

戦後になると 1955 年(昭和 30)年シンフォニー・オブ・ジ・エア(旧 NBC 交響楽団)を皮切りに、56 年ウィーン・フィルとロサンゼルス・フィル、57 年ベルリン・フィル(指揮:カラヤン)、58 年レニングラード・フィル、59 年チェコ・フィル、60 年ボストン響、61 年ニューヨーク・フィル(指揮:バーンスタイン)、62 年アムステル



ダム・コンサートへボウ管など世界の名だたる楽団が続々と初来日し、名古屋では公会堂で演奏しています。

なお、59年11月のウィーン・フィル2回目の公演(指揮はカラヤン)は伊勢湾台風の直後だったためチャリティー公演として被災者に義援金を贈ったそうです。

このように昭和30年代は市内唯一の大規模ホールである公会堂に公演が集中しましたが、すぐ横を通る中央本線の、当時は蒸気機関車の汽笛が演奏中に聞こえてしまうなど、苦勞も多かったようです。

また、この時期には海外演奏家も数多く公会堂に来演しており、バイオリンのヨセフ・シゲティ、アイザック・スターン、ヤツシャ・ハイフェッツなどを始め、ピアニストや声楽家らが演奏しています。とりわけ1956年(昭和31年)来日のウィーン少年合唱団は、折からの国内合唱ブームを背景に大きな反響を呼びました。

一方、国内演奏家に目を向けると、この時期国内オーケストラの活動も活発になり、N響・日本フィル・東京フィル・東京交響楽団・関西交響楽団などが次々と来名、地元では名古屋フィルハーモニー交響楽団(現在の名フィルとは別組織)が1949年(昭和24年)に公会堂で第1回定期演奏会を開いています。

クラシック以外のジャズ、ラテン、シャンソン等やオペラ、演劇などの公演も増えていきました。

これらの多くは、昭和20年代は名古屋市音楽協会、30年代に入ると放送局や新聞社、名古屋勤労者音楽協議会(労音)が主催し、市民の旺盛な鑑賞意欲を満たしました。



(旧)名古屋フィルハーモニー交響楽団
指揮:マンフレット・グルリット